

こえに だして よみましょう。

いちようの実 ^み ④

みやざわけんじ
宮沢賢治

東の空のききよの花びらはもういつかしぼんだよう
に力なくなり、朝の白光りがあらわれはじめました。星が
一つずつきえてゆきます。

木のいちばんいちばん高いところにいたふたりのいちよ
うの男の子がいました。

「そら、もう明るくなったぞ。うれしいなあ。ぼくはきつと
黄金色のお星さまになるんだよ。」

「ぼくもなるよ。きつとここから落ちればすぐ北風が空へ
つれてってくれるだろうね。」

「ぼくは北風じゃないと思うんだよ。北風は
しんせつじゃないんだよ。ぼくはきつとから



すさんだろうと思うね。」

「そうだ。きつとからすさんだ。からすさんはえらいんだよ。
ここから遠くてまるで見えなくなるまでひと息に飛んでゆ
くんだからね。たのんだら、ぼくらふたりぐらいきつといっ
ぺんに青ぞらまでつれていってくれるぜ。」

「たのんでみようか。はやく来るといいな。」